六二連『俳優評判記』の位置—新しい劇評媒体群のなかで—

池山　晃

観劇団体六二連によって製作された『俳優評判記』は、明治十一年から十九年までの間に二十七編までが刊行された。その基本的特徴としては、

・黒色表紙、横本という外形的特徴を、江戸期の役者評判記から踏襲する。
・毎号ではないが、これも役者評判記を踏襲して役者目録を載せ、位付と見立を付す。
・劇評の対象は当時の大劇場であった新富座を主とし、他座はもっぱら「付リ」（「袋」の記載）という位置づけである。
・評文は一見対話形式をとるが、連の人々による評に、投書による評を組み込んだものである（□○などの記号で区別をする）。

などの点があげられる。

これら『俳優評判記』については、法月敏彦氏の尽力によって、影印版で紹介され、また翻刻が進行しつつある。[注1] 一方、全二十七編について、マイクロフィルムによる閲読が可能となった。[注2] また、その内容である劇評の性格、現代劇評へとつながる問題点については、早くに今尾哲也氏の詳細な検証がある。[注3] さらに、明治期の評判記を一連の評判記の歴史のなかで「終焉期」のものとしてとらえる視点もすでに用意されており、[注4]『俳優評判記』もまた、そのような位置づけが可能である。

本稿は右の位置づけの試みとして、明治期の新たな状況として登場した新聞あるいは雑誌という、新しい劇評媒体（メディア）との関わりを中心にすえて、『俳優評判記』の特質を検証したものである。

なお、『俳優評判記』各編については、煩雑さを避けるため、単に〈初編〉、〈二編〉などと表記した。また、各種資料からの引用文は文末に適宜空白を設け、「御」を「五」とす

るなどの表記については、改めなかった。『俳優評判記』や新聞・雑誌の刊行時期については、日刊新聞は年月日、他は年月を記載し、年号の「明治」は省略した。

一　誕生の経緯

『俳優評判記』の興亡については、江戸時代の役者評判記を懐かしんで、復活させたものが、新聞・雑誌という新しい媒体に登場した劇評によって駆逐されていく、という単純な図式を描きがちである。ちなみに明治初年、これらの媒体に劇評が登場するのに先駆けて、東京、名古屋などで木版摺の評判記が出版された例があり、(注5)いずれも単発に終わったようである。しかし六二連『俳優評判記』に関していえば、その出現以前に新聞劇評は登場している。

新聞劇評については、明治十三年一月新富座の記者招待に始まるという、『続々歌舞伎年代記』にもとづく俗説に対して、すでに山本二郎氏は七年十一月の『郵便報知新聞』所載の記事を、先行する例として掲げる。(注6)これは精確には503号7・11・8の記事だが、さらにさかのぼれば、『報知』に演劇関係の記事が登場する早い例として、129号6・9・3がある。これは「風来散人」なる人物による投書で、実際の上演に即して歌舞伎の非写実的な演出に対する批判を述べたもので、六段余の分量にわたっている。後にこれに対する反響も掲載され、以後、この分野の記事も徐々に載るようになり、いわゆる劇評と呼べる性格のものも現れるのである。

政治向きの記事を中心とする「大新聞」の『報知』でもこのような状況であったが、市井の事件など、より軟らかい内容を中心とする「小新聞」であった『かなよみ』（十年三月十七日に従来の『仮名読新聞』から改称）でも、前出の招待記事以前に、はっきりとしたかたちで劇評が登場する。筆者は六二連の中心人物の一人、富田砂燕で、696号11・6・20から702号11・6・27にわたって新富座の評を連載した。新富座については同紙686号11・6・8でその華々しい開業がとりあげられ、696号によれば、各新聞社の招待がすでにこの時（前日の十九日）おこなわれたことが伝えられる。砂燕の評は、幕毎にとりあげて「跡は追〳〵」「跡は明日」などとして次回へつなぐもので、ちょうど、市井の事件を連載のかたちでつづった「続き物」と似た性格のものである。ところが、この記事が『俳優評判記』の胎動となったのである。

『かなよみ』796号11・10・17トップに「新富座俳優評判記発行の前披露」の記事が出る。ほぼ一段を占める長文のものであるが、中核部分を抜粋すると、

茲に東京劇場の見功者と二十余年来梨園に沓を入れて年々歳々六回の観を欠かざる六二連中（土間六側目の二を定例の観場とす）に最も活眼具評と聞えし高須高燕富田砂燕（一号つばめ）宮城玄魚（世称団十郎爺）の三名昨今新富座開場の日を待て連中衆眼一日の見物のみならず退

いて向ふ正面切落し追込立見の雑評をも折衷し其的当の説を取ッて新富座俳優評判記昔日所謂黒表紙製本の発行あらんとす　此の如きは独裁独決の評にあらずして実に劇場道の民選議院といふも可ならん

などとある。さらに最終面広告欄にも「俳優評判記再行の前披露」として、次のようにある。

往古八文舎自笑が著せし黒表紙役者評判記は久しく中絶したるを今般さらに興起たくに付芸評位付とも昔しのまゝに倣い新富座俳優評判記と題し当狂言より芝居毎に発兌いたし度に付江湖劇場好の諸君芸評位付を親疎になづまず五記載の上郵便にて来る十一月十日限り出雲町四番地かなよみ新聞社へ宛陸続五投書あらんことを希ふ

企主　六二連　梅素　高燕　砂燕　伏稟

こうして『俳優評判記』は、いったん新しい媒体に登場した劇評が、そこからさらに巣立つようにして、誕生したのである。

この過程に介在する重要人物として浮上するのが、仮名読新聞社社長でもあった、作家仮名垣魯文である。『俳優評判記』の〈初編〉は明治十一年十二月に刊行されたが、その巻頭に序を寄せた魯文は、署名肩書に「三世自笑の筆統」と名乗る。この三世自笑が江戸期の文人花笠文京であり、役者評判記の執筆者として自笑を名乗り、活躍していたことは、すでに検証されている。(注7)『俳優評判記』創刊当初から文京門人の魯文が関与していたとなれば、維新期の中断の後に復活、というふうに、江戸期の役者評判記との直接的な脈絡でとらえたくなるのはたしかである。しかし、魯文は実際のところ、どのような関与をおこなったのか。

二　仮名垣魯文の役割

魯文の果たそうとした役割は、巻頭に戯文調の序を寄せることであり、そして前章に引いたように、自らが社長を務める仮名読新聞社を投書の宛先とすることを引き受ける、ということであった。しかし、誤解と問合せが相次いだのであろうか、魯文は『かなよみ』799号11・10・20に言う。

二三日跡当社新聞の珍聞欄内前披露をした新富座俳優評判記は当社ではたゞ芸評位付の投書を纏めるぶんの事にて其評の取捨は六二連の梅素高燕砂燕（中略）の三氏を始め当時見功者の諸君が投書を集めて集議の上で評を加へられるのゆゑまだ版元も極りません　決して当社で売出のでは有ませんから看客左様に思召て下さい

また、刊行が始まって後、〈四編〉12・6の序には次のように言う。

当編評者署名の如く六二連中三子にて序者は評言に預らぬを魯文は誰が贔屓じやから誰ばかりを讃過るのアレ手前勝手じやのと毎々仮名読新聞社へ寄書やら俗文の書翰やらで贅な郵税を費すお方も間々有升が知る人ぞ知る序

文よりよく〳〵読ば解る事

当時の読者も高名な魯文の関与について誤解をしたことが確認できるが、編集および執筆内容については、彼は距離を置いていたことがわかる。

なお、魯文の門人にあたる野崎左文の文章[注8]に、

其頃富田砂筵(ママ)、高須高筵(ママ)など云ふ見功者が六二連といふ見連を組織し、替り目毎に総見物をして之を批評し、又昔の八文字屋に倣つて黒表紙横綴活版摺の評判記を出版して居たが、私も此の連中に加はつて二三度見物した事もあつた。

とあるが、ここにも魯文に関する言及はない。

魯文を「顧問」とするのはまだしも、「中心人物」とする[注9]のは、ためらわれる。おそらく魯文は担ぎ出されたのであって、それを仕掛けたのは、『かなよみ』796号に「企主」として名の挙がる三人のなかでもさらに筆頭格の、梅素玄魚であろう。[注10]

玄魚は、幕末期から板下書きなどとして活躍する一方、「粋狂連」の一員として魯文と交流があった。彼に代表される六二連の人々は「旦那方」「江戸の通人を明治の世に生きのびさせたやうな人たち」[注11]であり、その芝居観と、芝居に関する造詣の浅い記者たちによる新興の新聞劇評が対立するものであったことは、すでに知られている。

その状況のなか、『かなよみ』749号11・8・21のトップ記事、魯文の「俳優評判記容易ならず」と題した文章が登場した。彼は八文字屋による江戸期の役者評判記の概略を述べ、「彼黒表紙なる者を劇場道の審査鑑とす」と記したのち、

近年新聞紙発行以来劇場興行の都度諸新聞に俳優の芸評を記する諸社前を争ひ未開場より六日を経ず俳優其役に熟煉せざる内彼仕打はあゝでも有めへ彼せりふは不相当抔と記者は自由の権を以て自問自答の評を下すに其評言や諸新聞区々の想像説而己

などと述べているのである（表題の「俳優評判記」は、ここでは広く「劇評」の意であろう）。

同紙に連の劇評を載せ、そして新聞劇評への批判を公に表明した魯文に対し、旧知の間柄で十二歳年長であった玄魚は、協力を要請したのではないか。彼らの行動が「評判記」というかたちをとったという着想、そしてその実現への自信も、評判記作者の筆統をつぐ魯文の存在が、大きかったのではなかろうか。

この要請に対して応えた魯文であるが、〈初編〉から奥付に「印刷　仮名読新聞社」と明記されている。また、『かなよみ』842号、11・12・12所載の広告に「元大売捌」として「仮名読社」とある。前出『かなよみ』799号の記事があったにもかかわらず、結局、印刷と売捌きまで引き受けたのである（編輯兼出版人は、連の一員、海寿堂海老屋林之助）。

ところが、玄魚は十三年二月に没し、その記事を載せた

〈八編〉13・6から印刷所は「愛善社」へと移っている。同社発行の『芳譚雑誌』25号13・3に寄せた魯文の玄魚追悼文「梅素小伝」に拠れば、同誌の後ろ盾、携帯薬宝丹本舗主人の守田治兵衛は、玄魚と縁が深かったという。

すでに魯文自身は十二年十一月に仮名読新聞社を退社し、十二月に『いろは新聞』を創刊していたが、その16号12・12・21の広告を見ると、「いろは新聞売捌所　仮名垣」の売捌品目が十五点並ぶ末尾に、「○いろは新聞○歌舞妓新報○俳優評判記」とある。また、『俳優評判記』の序文はその後も寄せ続けた。このような協力支援の態勢は一応続けていくのだが、玄魚死没の時点で、『俳優評判記』と仮名読新聞社とのつながりが弱まったこと、さかのぼって、魯文と『俳優評判記』の結びつきが玄魚を通したものであったことが、版元変更の事実からよみとれるのではなかろうか。

魯文自身が評判記の内容に加担しようとしなかったという点については、どのように考えられるか。彼は当時の芝居に対して批評、批判は忌憚なくおこなっている。その代表例が「活歴（史）」の語に象徴される九代目市川団十郎批判である。また、彼が移った『いろは新聞』は、〈十一編〉14・4で

過日いろは新聞（悪口の家元）にも賞て有た通り

と呼ばれる羽目になる。団十郎贔屓といわれた『俳優評判記』と魯文は、協力支援の一方で、他の新聞劇評とは違った意味合で対立したのである。彼はいわゆる「評判記」的な、「批評」でなく「評判」に終始する役者の扱い方を好まなかったということであろう。

一方で、魯文は広義のいわば「評判記文芸」との関わりとして、『新編客者評判記』を『歌舞伎新報』350号16・10・8から373号16・12・26のうちで計十九回、その続編を374号16・1・□（日不明）から395号17・3・17のうちで計十二回にわたって連載した。これはむろん、式亭三馬の『客者評判記』にならった作品で、評判記の様式を用いて当時の観客たちを皮肉をまじえて活写し、好評を得たのである。役者評判記なり、すでに刊行中の『俳優評判記』への魯文の対し方としては、その手法は役者に対するまっとうな批評のために用いられるものではなく、戯作執筆のうえで、活写のための一手法として有効なものとしての比重が大きかったと考えられるのである。

『俳優評判記』への魯文の関与は、その内容よりも側面的支援という点において際立つのであり、特に、その誕生の過程で母胎となった他媒体の中核として、重要な存在だったのである。

三　評文の手法の意義

『俳優評判記』の内容（劇評）に関しては、あくまでも連の主導によって作成されたものと確認してよかろう。本章では、彼らが主導した『俳優評判記』の特質のなかで、やはり

他媒体との関連で注目すべき点をとりあげてみたい。

まず『俳優評判記』を主導する六二連の姿勢として、確認しておきたい点がある。〈二十編〉16・6に中村仲蔵名義の投書があり、劇評のなかの不備を突いたうえで、

六二御連の方々様は初日より楽の日迄御見物下され度

という。これに対して、連側は、

我輩道楽に見物致す事故楽迄見る抔とは思ひも寄ぬ事也

と明言している。

これに関連して、〈二編〉11・12に

宗十郎は投書にもなし　社中でも見ず　略し升

左団次菊五郎のは社中たれもみませんでした　おしい事

投書にも無ゆゑ略しました

などとあるように、見逃したものについては無理に評を書かないという態度をとっている。この態度については真摯さ、潔癖さを評価されることもあるのだが、〈二十編〉の記事と考え合わせると、むしろ無理なことをしない、「道楽」ならではの気楽さ、自分たちの作りたいように作っていく、という姿勢がうかがえる。

創刊当初からあくまでも新富座の評を主眼に据え続けるのも、こういった姿勢の表れであった。事情により他座の評をとりあげた際にも、読者の反応は悪くはなかった。しかし、連側は新富座評に固執し続け、結果として、新富座の弱体化とともに刊行が間遠になり、投書も減り、『俳優評判記』の衰滅を招いたのである。

さて、同様に、たとえ読者の要望に添わない結果となってもあくまで自分たちのやり方を貫くという姿勢が、評文の形式についてもみられる。〈三編〉12・3に、「本所相生町の桑田君と云評判記通の先生」からとして、役者評判記の大きな特徴である、仮構評者の対話形式による評文を要望する投書が紹介されているが、

全体其評議も有升たが旧の評判記と違ひ一人にて綴る物でなく諸君の五高評を社中の評言に併て編集致す物ゆゑ

桑田君の五懇命に従がたし

と、回答している。読者の要望にもかかわらず、そして江戸期の役者評判記の様式に固執せずに、新しい投書組込み形式で通そうとするのである。

このことに対しては、一章にかかげた『かなよみ』796号の魯文の前披露にいうような「劇場道の民選議院」的性格、劇評に客観性を求めた、という評価が与えられがちである。仮構評者形式を要望するような懐古的な読者よりも、この点では彼らの意識が進んでいたと考えたくなるところである。

しかし、これはむしろ、「投書」という行為が当時の媒体全般のなかで活発化し、一大勢力となっていたという、より大きな状況のなかに位置づけられるべきではなかろうか。(注12) さらにいえば、連の人々自身、『かなよみ』や『歌舞伎新報』などへ積極的に投書する側の人間であった。これらの点を充

分認識すべきであろう。

ただし、〈五編〉12・10において、筋書紹介不要の旧作『源平布引滝』の評については、

嗚呼がま敷も私共頭取の座に直り升て見功者連の投書を夫々撰分升て（芝居好）（見功者）（わる口）（ヒイキ）等に配当致し

という方法を用いて、仮構評者形式を採用している。そして〈九編〉13・9でも、新作『霜夜鐘十字辻筮』の筋書が『歌舞伎新報』で紹介されているため、

今更事新し相に筋書を御目に掛升も重複の恐れ有ば如何致し升うと社中評議致居升たる処去投書家先生より昨卯年夜芝居布引滝評判記の砌故八文字屋風の口調に倣って記載し升たるを殊の外御意に叶ひ今度も右体裁に編輯する様にとの御差図に随ひ

と、これも同じ仮構評者形式をとったのである。この形式がやはり読者には好評だったことも右からわかる。[注13] しかし、筋書紹介という大きな眼目を欠く場合の代替的な趣向として用いられたが、実際の読者からの投書をわざわざ仮構評者に当てはめるという趣向は、通常は避けられたということのようである。

読む側の仮構評者形式への要望はたしかに強かった。また、この形式は決して古びたものではなく、文芸批評の分野で新たな展開を示していくことになる。[注14] しかし、要望の強い役者評判記の手法をあえて採用せず、他媒体にも共通する当時の趨勢を背景として、自分たちのやり方を選択、継続した事実は、評判記の歴史のなかで注目すべき点であろう。

四　連携と競合のなかで

『俳優評判記』の評文を形成するのは、連の評、投書の評、そして実は、他媒体掲載の評もしばしば含まれていた。これは一見安直さをうかがわせるようであるが、実は、当時の新聞業界において、他紙の記事を引くということは、かなり活発に行われていたのである。[注15] つまり、これもまた、当時の媒体における趨勢をふまえた現象だったのである。

『俳優評判記』の創刊が近づくと、その母胎となった『かなよみ』の819号11・11・14に

同座の俳優評判記は今度に限りなぜ載さぬのだと看客からの五催促もありますが先日ちよつと五披露した六二連の黒表紙がいよ〳〵近々発兌になりますから当社では載しません　五覧下さるなら今少し五辛抱を願升

とあって、新富座評についての分担意識がひとまず示されようとしている。しかし実際には、

菊五郎の教康は仮名読新聞第九百〇四号に若大将の出立で黒髪の兜下それへ立烏帽子を冠つた所は丸で画に書た巴御前だといつて居ましたト云評も有まして

（〈三編〉12・3）

などとあるように、同紙に先に評が載って、それを『俳優評判記』が引くこともあった。なお、同紙930号12・4・4には次のような記事がみえる。

今般発兌の新富座俳優評判記第三編役者品位の件、市川団十郎の上大極上吉吉は大極上上吉の誤まり　右は評者の筆にあらず全く印刷の際活字組違ひの麁漏よりかゝる誤まりを生じ候ことゆゑ江湖看客方へ謹しんでお詫〳〵

印刷引受　仮名読新聞社校合者　何某敬白

印刷の責任上とはいえ、評判記の誤りを早速新聞紙上で訂正、謝罪するという、二つの劇評媒体の連携ぶりがうかがえる。

雑誌『歌舞伎新報』(12・3創刊)もまた同様の関係に置かれる。具体的には、同誌が上演作品の筋書紹介を売り物の一つにするようになると、逆に『俳優評判記』がそちらに譲るようになっていく。前章に掲げた〈九編〉の例もそうだが、

此狂言の脚色は歌舞伎新報仮名読新聞等に委しく載て有升ゆゑに爰には略し升て　(〈五編〉12・10)

などとあって、これは「対抗上」(注16)の変化というよりも、ゆるやかな連携というべきものであった。『歌舞伎新報』と『かなよみ』は、編集者として久保田彦作が関わっていることから一線で結ぶことができ、『俳優評判記』とともに、いわば「身内」といってもよい関係にあったが、それ以外の新聞も、次に引くように、明記の有無の別はあれ『俳優評判記』創刊当初から盛んに引合いに出されているのである。

此碁の所は諸新聞でも色々やかましく言れたる内蔵の進が差添をさして居るは余り失敬ではないかと云説あれども　(〈初編〉11・12)

因に記し升と申は報知新聞に言る事あり曰「延寿太夫の独吟は甚だ感ずる能ず(中略)」名評と云べし　(〈四編〉12・6)

いろは新聞の評に云れし如く毎度関東勢をなやませし剛勇とは見得ず　(〈十編〉13・12)

そもそも、読者の投書を待って成稿、刊行に至る『俳優評判記』は、自身が「六日の菖蒲十日の菊」という諺を引くように(〈十六編〉15・8、〈二十五編〉17・11)、劇評の即時性という点では、新聞や雑誌に到底かなうものではなかった。『劇場新報』5号11・8に投ぜられた「狂句」に

月に三度しか新報はおつ起たず

とあるのは、バレがかった句であるが、一方で当時の読者が劇評媒体に頻繁な発行を求めるようになっていたことを象徴しているようである。

そこで六二連としては、むしろ即時性でかなわないのを逆手にとって、先行する他媒体所載の評や筋書を引きつつ、投書も待ち受けて総括する、という手法によって、自らの「居場所」を見つけたのであろう。

なお、他媒体のなかでの位置ということに関して、価格という点からも確認しておきたい。『かなよみ』842号11・12・

12所載の広告によれば〈初編〉は十銭、〈二編〉は875号12・1・25広告に十二銭五厘とあるが、翌日の876号では十二銭に訂正されている。〈三編〉についても930号12・4・4によって、十二銭であったと判明する。すでに法月敏彦氏によって、〈十一編〉以降の数点について、「袋」の印影を根拠に十二銭と推定されているが、(注17) かなり早い段階で十二銭という価格が定着したのではないかと考えられる。

これに対して、『かなよみ』は一銭（一ケ月前金二十銭、三ケ月前金五十銭）、月三回の『歌舞伎新報』は三銭、同じく『劇場新報』は二銭、注13に掲げた『是が誠／真の評論壱号』は七銭、などとある。刊行頻度や情報量も勘案せねばなるまいが、『俳優評判記』はその価格や体裁に示される通り、また、六二連が「道楽」と表明する刊行姿勢が示す通り、かなり「贅沢」な劇評媒体であったといえよう。それだけに、他媒体に伍して足かけ九年間、二十七編の命を保った事実は、その芝居観と独自の居場所の主張が支持を得て善戦したのだ、ということを示していよう。

『演芸世界』1号34・3所載の、同誌の創刊に寄せた投書のなかに、

一号を見ねば知れねど黒表紙流の劇評を願ふ（魚河岸隠居）

との要望が出る。「黒表紙」はすでに引用文中に登場したが、役者評判記の通称である。

江戸時代末期に役者評判記は弱体化し、特に江戸という土地においては、似顔見立給金付、役者評判絵などと現在呼ばれる各種競合物に力を奪われたようである。それでもさすがに古くからの実績の蓄積によるのであろう、明治期にはいっても、役者評判記は人々の脳裏に残像を結び、それは右のような時期まで及んでいたのである。

その残像をもとに評判記を復活させたのが、六二連の『俳優評判記』であった。しかしそれは、古いものを無批判に再生して、新しいもののなかで淘汰されていったのではない。劇評をめぐる新たな状況に反発しつつも、新しい媒体から巣立つかたちで登場し、それら諸媒体をめぐる趨勢に乗じながら、自らの位置を探ったのであった。評判記の歴史のなかで終焉期にあたる時期に登場した『俳優評判記』は、劇評の媒体や担い手をめぐる新たな様相のなかでよくその状況をふまえつつ、積極的主体的な奮闘をみせた、という点に、一つの評価を与えてよいのではなかろうか。

注

(1) 法月敏彦「六二連「俳優評判記」」、『歌舞伎　研究と批評』1（昭63・8）～19（平9・6）に〈初編〉から〈十七編〉まで。同編『六二連俳優評判記』（歌舞伎資料選書9）、現在上巻、平14・3に〈十編〉まで。

(2) 『マイクロフィルム版　早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵　役者評判記』平9～10。
(3) 今尾哲也「六二連の「俳優評判記」について」、『演劇評論』12（昭29・8）～13（昭29・9）。
(4) 荻田清「終焉期の役者評判記管見」、『混沌』13、平1・7。
(5) 注4荻田論考。
(6) 山本二郎「明治初期の劇評」、『演劇界』6―8、昭23・8。
(7) 木越俊介「〝代作屋大作〟花笠文京の執筆活動について」、『近世文芸』68、平11・1。
(8) 野崎左文「明治初期の新聞小説」、『私の見た明治文壇』昭2・5。
(9) 戸部銀作「六二連の事」、『日本演劇』4―3、昭21・4。
(10) 秋庭太郎「魯文のことゞも」、『明治文学全集』第一巻月報、昭41・1。
(11) 注6山本論考。
(12) 注8の文章で、野崎左文は「投書家の勢援」という表現を用い、その様相を述べている。
(13) 六二連『俳優評判記』の刊行中に、これに対抗して発行された評判記は何点かあるが、その一つに『新富座俳優評判記　是が誠／真の評論　壱号』14・12がある。特徴として仮構評者形式を採用しており、そのことが「是が誠」とうたう根拠の一つとなっていると思われる。編輯兼出版人は倉田太助。注2雄松堂マイクロフィルムの目録には書誌事項として「六二連」をとるが、評文中に評者として登場する「六二連」は、仮構されたものである。続刊とみられる『猿若座俳優評判記　是か誠／真の評（ママ）　弐号』（15・□（月不明）、六月興行を扱う。）になると仮構評者はなくなり、以後続刊は確認できない。弐号は注2雄松堂マイクロフィルムには未収。東京大学総合図書館所蔵『市村座狂言筋書』（F70―171）に壱号とともに所収。
(14) 森鴎外他「三人冗語」、『めさまし草』明29・3～7など。
(15) 当時の新聞に、他の新聞からと明記して記事が引用されている状況については、座談会「つづく…新聞小説の通路」、隔月刊『文学』4―1、平15・1にふれられている。
(16) 注6山本論考。
(17) 注1両資料の法月解題。

※『俳優評判記』の閲読については、注1および2に掲げた資料より多大な恩恵を蒙った。深謝申し上げる次第である。